

小児救急医療の チャレンジ精神

——子供たちの生と死をみつめて——

Dorothy Anna Jarvis, M.D.

聞き手：佐多保彦 株式会社東横機 代表取締役社長

佐多：ジャービス先生のいらっしゃるトロント小児病院は、私も何度も訪問しておりますが、1993年に大改築をされてからは、特にロビーの辺りは、訪問する子供たちやその家族にとって、非常にワクワクするような楽しい雰囲気です。光が溢れていて、楽しい芸術的な落書きがたくさん描かれた、大きな“ふきぬけ”のあるロビーの様子は、入院中の子供たちの部屋やプレールームからも見えるようになっていて、とても素晴らしい病院です。先生はそこで救急医療を担当されていますが、小児救急医療というのはかなり難しい分野ですか？

ジャービス：確かに非常に難しい分野ですが、だからこそ私にとってチャレンジングでやりがいがあります。子供たちは普通、自分の症状を言葉で上手に表現できません。表に現われる現象は、熱があるとか、泣き叫ぶとか、数少ないものです。静かな子供も、油断できません。泣くこともできないほど、衰弱していることがあるからです。気をつけて診てあげる必要があります。わずかな情報を頼りに、この子はかなり容体が悪い、この子は快方に向かっているなど、子供たちの病状を的確に見極めていなくてはなりません。

佐多：小児科ならではの苦労があるわけですね。

ジャービス：症状を正確に理解するためのコミュニケーションが一番難しいのです。診断がついても、子供は注射や薬が嫌いですから、治療を受けさせるためのテクニックも必要です。その子の年齢によって、声を覚えてみたり、言い方を変えてみたりして、説得していきます。大変な仕事ですが、こういった大変な部分がこの仕事を特別なものにし、また自分が常に新鮮な気持ちで仕事に取り組める理由かもしれません。

佐多：小児病院の対象年齢は何歳から何歳までですか？

ジャービス：新生児から17歳までです。16歳頃にもなると、既に考え方はしっかりしてきますし、親と一緒に来院しながらなくなります。そこからが、また私たちのチャレンジになります。十代



の若者は正しい判断を下すには、まだまだ社会経験が足りません。間違いない判断をしてもらうために、いかに彼らを納得させるかという問題になります。カナダでは、患者が判断する能力に年齢的な制限を設けないことが法律で決まっているので、「子供の人権」には特に気をつかう必要があるのです。

佐多：救急医療というのは一刻を争いますが、現場での仕事はどのように運ぶのでしょうか？

ジャービス：患者が搬送されてくると、まず症状を5つの段階に分類して、治療の優先順位をつけます。第一段階は、生命に危険のあるような重篤な場合。第二段階は、目や手足などの重要な器官を失う恐れのある場合。例えば、目に異物を刺して視力を失う恐れのあるケースなどですね。第三段階は、緊急、つまり高熱や毒物を誤飲したなどの早急に処置が必要な場合。第四段階は、風邪などの、それほど緊急でない場合。そして第五段階が、緊急を要さない場合。この段階の患者は、一般病棟に回します。しかし、このように治療の優先順位をつけていても、子供の場合はそれがそのまま適用できるとは限らないのです。例えば、体温も脈拍も正常だから第五段階と自動的に分類はできません。そこが小児救急医療の難しいところです。特に小さな子供では症状を訴えることができないので、診断しにくいのです。

佐多：救急医療の究極はおかしな考え方もかもしれませんが、結局予防医学に行き着くのではないのでしょうか？現代は科学技術の発達でより快適な生活を追求してきたわけですが、皮肉なことに悪い影響も多々出てきているわけです。環境問題はその最たるものですが、現代の救急医療にもその影響は確実に出てきているのではないのでしょうか。

ジャービス：私はジャマイカの出身ですが、カナダに来て驚いたことは、子供たちが事故で受ける傷害の酷さです。バイクなどによる交通事故、モーターボートの事故、農業機械やトラクターによる事故など、適切な予防措置が講じられていれば、防げた傷害が多いので

ジャマイカに生まれる。69年にジャマイカのウエスタンディーズ大学を卒業。同大学附属病院にて研修を受けた後、72年にカナダに渡り、トロント小児病院に勤務。現在、同病院の救急医療を担当。その傍ら、トロント大学小児科教授として教鞭をとる。

(* 1) 死期の近い患者を身体的・精神的苦痛から救うために死に至らしめることを安楽死というが、治療を中止する消極的安楽死(*Passive Euthanasia*)と、薬物を投与する積極的安楽死(*Active Euthanasia*)とに分けられる。

(* 2) By Jean-Dominique Bauby, Vintage Books, A Division of Random House, Inc. New York
著者は仏「ELLE」誌の元編集長。

す。シートベルトをしていなかったために、事故の衝撃で車外に投げ出され、対向車に轢かれた傷害などは、それは悲惨なものです。そこで、車ではシートベルトをさせるように、自転車やバイクに乗るときにはヘルメットを必ずさせるように親たちを指導しています。そしてモーターボートや農業機械やトラクターに関しては、免許はいらないといっても、しっかりとした判断能力が備わる年齢までは子供の能力を超える機械の操作をさせないように指導しています。

佐多：医療の現場では、社会的な動きが影響しますね。オランダで安楽死が認められましたが、それに関してはどう思われますか？
ジャービス先生は子供の命を救う側ですから、適切な質問ではないかもしれませんが。

ジャービス：私たちは、搬送されてきた子供たちがどんなにひどい状態でも、まずできる限りの治療を行います。しかし術後の経過を見て回復の余地が見られない場合、家族にその旨を告げます。いたずらに治療を続けることは、苦しみを長引かせる結果にもなりますから。当然、本人にも話します。お話しした通り、カナダでは患者が判断を下すのに年齢は関係ないのです。長い間、病気で入院している患者についても同じようなことが言えます。私たちの病院に、14歳位の末期癌の少年がいました。彼は死が終わりだということ、死からは戻ってこれられないということをはっきりと認識した上で、死を選びました。私たちは、そういった子供たちの決心をサポートし、安らかに最期を迎えさせることができます。安楽死は医療の一環に既に組み込まれています。

佐多：安楽死が日本の医療の現場で確立されるのはまだまだ難しいと思います。患者が生死を自己選択できるまでには、相当時間がかかると思います。

ジャービス：患者が選択できることは確かに大切なことです。しかし、私はそれに納得しているわけではありません。大変な病に苦しみ、絶望し、おびえ、先の見通しが立たない状態に堪えられない患者をたくさん診てきましたが、しかし一方で生きるという



ことの素晴らしさにも気付くことができます。安楽死については、私は *Passive Euthanasia* (* 1) の立場をとっています。

佐多：今までに多くの患者を診ていらっしゃると思いますが、奇跡だと思われた体験はありますか？

ジャービス：私がチーフレジデントだった75年頃の話です。喉頭蓋の感染症で治療を受けていた3歳の少年が、呼吸困難になったとき医師が気管切開を施したのですが、その医師は子供の気管切開は初めてだったので、誤って動脈を傷つけてしまいました。少年は大出血し、私たちのところに搬送されてきたのですが、大出血の結果、心停止状態でビクリとも動きませんでした。私は上司の教授に「呼吸困難と大出血の二度のショックを受けています。回復はありえませんが、このまま逝かせてあげましょう」と相談しました。しかし、教授は少年を診て、「心臓が止まってからどのくらい経っているのかデータがない。この子の生命はこれからまだ先が長い運命かもしれない。だからそんなに簡単に諦めてはいけない」と、治療の継続を指示しました。そしてできる限りの処置を施した結果、少年は1週間後に意識を回復したのです。リハビリセンターに通いながら、9ヵ月後に少年が母親に連れられて会いにきてくれたときには感動しました。誰もが駄目だと考えた状態から、彼はここまで元気になったのですから。心停止の影響で身体に麻痺が残っていましたが、子供の麻痺はリハビリで必ず回復するので、心配はしませんでした。少年は生き返ったのです。私にとって、忘れられない体験でした。

佐多：生命力の不思議と偉大さを感じますね。その関連でなにか記憶に残っておられる本はありますか？

ジャービス：『The Diving Bell and the Butterfly』(* 2) をお勧めします。脳出血により障害を負い、意識は正常なものの、話すことも動くこともできない状態に陥った男性患者の、心の軌跡をつづった本です。常識では受け取りえない衝撃的なメッセージがここにあります。「生きる」ということに対して真剣に考えさせられました。機会があったらぜひ読んでみてください。

遺伝性パーキンソン病の 病因解明

——神経変性疾患治療への第一歩——

高橋 良輔



パーキンソン病とは

神経変性疾患とは、脳の神経細胞が徐々に死んでいき、その結果として脳の大切な機能、記憶・学習・運動機能などに重い障害がもたらされる難病をひとくくりにして呼ぶ言葉です。アルツハイマー病は、学習や記憶に関わる神経細胞が死んでしまうために起こる神経変性疾患の代表的な病気です。パーキンソン病はアルツハイマー病に次いで多い神経変性疾患で、日本には約12万人の患者さんがいると推定されています。

パーキンソン病はアルツハイマー病と違って運動機能が障害される病気です。パーキンソン病の患者さんの脳を調べると、中脳の黒質という場所のドーパミンをつくる神経細胞が死んでしまい、少なくなっています。ドーパミンは神経細胞と神経細胞の間の連絡に使われる「神経伝達物質」の一種で、運動を円滑に機能させる神経回路の働きに不可欠です。パーキンソン病はドーパミン神経が死んで、脳内のドーパミンが欠乏してしまうため、運動に障害が起こると考えられます。

イギリスの医師、ジェームズ・パーキンソンが「振戦麻痺」という名称でこの病気を最初に記載したのは、1817年のことでした。それから140年以上を経て、パーキンソン病の病変部位である黒質にドーパミンが局在することを、スウェーデンのカールソン(2000年度ノーベル医学生理学賞受賞)と日本の佐野勇らがそれぞれ報告したのは1959年のことです。それ以来、この病気でドーパミン神経がなぜ死ぬのかを明らかにしようと、40年あまりの間多くの研究が行われてきましたが、その答えは得られないままでした。

私たちは、最近その病因の一端の解明に貢献することができたので、ご紹介したいと思います。

遺伝性パーキンソン病 — AR-JP

パーキンソン病にかかる人は50歳から60歳にかけてが最も多く、アルツハイマー病と同じく高齢者の病気といってよいでしょう。また多くは孤発性といって遺伝しないのが普通です。ところが患者さんの5%は遺伝性のパーキンソン病を発症します。遺伝性パーキンソン病の患者さんの発症年齢は、通常20歳から30歳にかけてと若いのが特徴です。遺伝性パーキンソン病のうち、特に劣性遺伝で起こるタイプは日本で研究が進み、「常染色体劣性遺伝性若年性パ

ーキンソニズム」(英語名の省略型の名称は「AR-JP」と名付けられました。AR-JPの遺伝子探しでも日本が世界に先行し、1996年、新潟大学と順天堂大学のグループによって、AR-JPの病因遺伝子が第6番染色体にあることが示されました。1998年には、慶応大学と順天堂大学のグループが、AR-JPが第6番染色体上に遺伝子座のあるパーキンという蛋白質の欠損によって起こることを突き止めました。この発見によって、分子遺伝学的手法でパーキンソン病の病因に迫る道筋がはじめてつけられました。

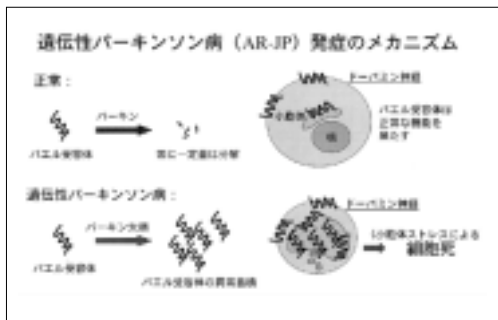
AR-JPの病因遺伝子がわかるまでのパーキンソン病研究は、どういう環境因子や生活習慣が病気になるやすいかを探索する疫学の研究や、パーキンソン病と似た症状を起こす神経毒の作用を調べる毒物学の研究が主体でした。もちろんこのような研究も大切ですが、病因遺伝子を基礎にした研究では、遺伝性という特殊なタイプのパーキンソン病ではあるものの、確実に病気を起こすものになる物質(遺伝子)に基盤を置いた研究ができる強みがあります。私たちはこのような考えにもとづき、AR-JPの病因解明の研究に着手しました。

AR-JPの病因遺伝子 — パーキンの機能

AR-JPという疾患は、正常なパーキン蛋白質がなくなることによって引き起こされます。健康な人ではパーキンが正常に働くことによって、パーキンソン病にかからずにすんでいるわけです。それではパーキンの正常な働きとは何なのでしょう？ パーキンが発見されてから約2年後、答えは意外なところから導き出されました。

パーキンはリングフィンガーといわれる、他のいくつかの蛋白質にも共通する特徴的な構造をもっていますが、その生理的な役割は全く不明でした。そんな状況の中、突然一部のリングフィンガー蛋白質が蛋白質の分解を促進する働きをもつ、ユビキチンリガーゼと呼ばれる酵素であることが解明されたのです。ユビキチンリガーゼそのものには蛋白質を分解する活性はありませんが、ある特定の蛋白質とだけ結合し、その蛋白質が分解されるためのユビキチンというしるしをつけるのが、ユビキチンリガーゼの役割です。パーキンがユビキチンリガーゼであることは、ほどなく東京都臨床研や我々を含む3つのグループによって証明されました。またAR-JPの患者さんでみつかったパーキンの変異蛋白質では、ユビキチンリガーゼ活性が失われているこ

1959年、京都市生まれ。83年、京都大学医学部卒業。東京都立神経病院などで神経内科臨床に従事した後、東京都神経科学総合研究所神経学研究部門・主任研究員となる。この間、米国カリフォルニア州ロホヤのバーナム研究所・ジョンリード研究室に留学。99年より、理化学研究所・脳科学総合研究センター・運動系神経変性研究チーム・チームリーダー。



(図)

とがわかりました。つまり、パーキンがもっている蛋白質分解の促進機能が失われることが、パーキンソン病を引き起こすと考えられます。パーキンのユビキチンリガーゼ機能がなくなると、本来分解されるべき蛋白質が細胞内に異常に蓄積するはずで、そしてこの蛋白質の異常蓄積が神経細胞を死に至らしめることが予想されます。つまり、パーキンがその機能を失うことによって異常蓄積した蛋白質が、ドーパミン神経細胞を殺してしまう「犯人」というわけです。

今回私たちは、酵母を使った強力な遺伝子クローニング法により、ドーパミン神経殺しの「犯人」をつかまえることに成功しました。

ドーパミン神経殺しの犯人となる蛋白質 — パエル受容体

私たちがつかまえた犯人の正体は、意外なことに細胞膜に存在する「受容体」と呼ばれる蛋白質でした。神経は他の神経と多種多様な情報交換を行うことによって運動、知的活動などの機能を実現しています。受容体は、そのような高度の神経活動に欠かせない情報の受け手となる蛋白質であり、神経はさまざまな受容体蛋白質を発現しています。私たちは、健康人の脳ではパーキンによって分解される運命にあるこの蛋白質を、パーキンと関係する受容体という意味をこめて、パエル受容体と名付けました。

パエル受容体がどのような生理的機能を担っているかはまだ不明ですが、脳に特異的に発現していて、神経細胞の中では特にドーパミン神経に高度の発現がみられることがわかりました。興味深いことに、この受容体を遺伝子工学の手法で哺乳類培養細胞で大量に発現させてやると、受容体を発現した細胞の一部が死んでしまうことが観察されました。大量発現に加えて、この受容体の分解を薬剤を使って阻止すると、細胞死の程度はさらにひどくなり、パエル受容体を発現している細胞のうち70・80%が死んでしまいました。パエル受容体は健康人の脳にも発現している蛋白質なのに、どうしてこんなことが起きるのでしょうか？

細胞膜にある蛋白質は新しく生成されると同時に、小胞体という袋のような小器官に送られます(図)。膜蛋白質は膜を貫通する部分をもつなど、複雑な構造をしています。複雑なだけにちゃんとした完成品になるために手間がかかります。手間がかかるだけでなく、場合によっては「失敗作」の方が多くなってしまふこ

ともまれではありません。小胞体はこのような「完成品」と「失敗作」の選り分けをする品質管理工場の役割を担っている場所です。「完成品」は小胞体を通して細胞膜に送り込まれますが、「失敗作」は細胞質に戻されて分解されてしまいます。分解系が障害されて、「失敗作」=異常蛋白質の分解が滞ると、その異常蛋白質は小胞体に蓄積します。小胞体はそれをストレスと感じ(小胞体ストレスと呼ばれます)程度が軽いうちは細胞を防御するシグナルを発しますが、蛋白質の異常蓄積が限度を超えたと判断すると、能動的な細胞死であるアポトーシスのシグナルを発動して細胞死を引き起こします。

パエル受容体は、「失敗作」が「完成品」を常に上回ってしまう、正しい構造をとりにくい蛋白であることが私たちの研究で明らかになりました。健康者では、パーキンによって「失敗作」のパエル受容体が常に分解されているのでこたなきを得ているわけですが、パーキンが欠損したAR-JPの患者さんでは、分解されなくなった出来損ないのパエル受容体が小胞体に蓄積し、神経細胞死が起こると考えられます(図)。事実、患者さんの脳では、パエル受容体为非AR-JP患者さんの脳の10倍から30倍以上も蓄積していることが確かめられました。

パーキンソン病の治療に向けて

以上のことから、AR-JPは患者さんの脳に溜まったパエル受容体を掃除するか、その産生を抑えることによって治療が可能と考えられます。これはまだアイデアの段階ですが、よいモデル動物ができれば、臨床応用へ向けての研究が飛躍的に進むことが期待できます。また遺伝性でない普通の孤発性パーキンソン病でも、パエル受容体がそれに似た異常蛋白質の蓄積が原因になっているかどうか大切なポイントでもあるので、調べているところです。

最近の研究によって、アルツハイマー病をはじめとする他の神経変性疾患でも異常蛋白質、いわばゴミ蛋白が脳に溜まることが病気の原因となっているらしいことがわかってきました。高齢化社会を迎え、神経変性疾患に苦しむ患者さんの数も徐々に増加しつつあります。このような脳の有害なゴミ蛋白の掃除を可能にし、神経変性疾患の有効な治療法を確立することが、私の研究者としての最大の夢であり、歩みはゆっくりでも夢に向かって着実に前進していきたいと思っています。

水頭症の現状をみつめて

——今、患者が望んでいること——

日本水頭症協会・代表 山下泰司

6月11日(月) 日本水頭症協会代表・山下泰司氏に弊社幹部社員を対象に体験談をお話ししていただきました。その内容を編集部がまとめたものです。

1996年の12月13日に、一人娘の晴子が誕生しました。町の普通の産婦人科で産まれたのですが、医師が年配の方で、通常エコーで胎児の成長を観察するところを、触れば大体のことは分かるということで、ある時期からエコーをやめてしまいました。そのため、産まれて初めて頭に瘤(髄膜瘤)があるのが分かり、非常に驚きました。すぐに大学病院に移されたのですが、当日は妻になにも言うことができませんでした。生後11日目に瘤を除去する手術を行い、しばらく様子を見ていましたが、10ヵ月目には頭囲が小学校1年生程度にまで大きくなったため、シャント手術を受けることになりました。しかし、「これは水頭症です」、「V-Pシャントを入れます」と説明されても全く理解できず、随分医師に抵抗しました。こんな小さな子供の身体に、そんなものを入れるということが納得できなかったのです。

そこで自力で調べようとしたのですが、資料が非常に乏しく、しかも実際の体験者の話というのが皆無なのです。それでインターネットで検索したところ、アメリカのメーリングリストに出会い、色々な方から手術についての体験を伺うことができました。とても勇気づけられ、やっと手術に踏み切ることができました。

晴子のシャントは幸いに詰まることもなく、脳室拡大も止まり、水頭症自体は落ち着いているのですが、やはり脳になんらかの問題が残ったのでしょう。現在4歳になりますが、自力でお座りすることもできませんし、言葉も獲得していません。

この経験から得た結論は、医師に手術前にはっきりと説明してほしかったということです。説明を受ければ、私たち患者の家族が激しく抵抗すると考えていたのではないのでしょうか。しかし誤解を防ぐためには、例えばシャントに関しても、実物を見せてもらいながら説明していただくと患者側はとても助かると思うのです。

私と同じような疑問を持っている患者とその家族の支えになれればと、メーリングリストを日本語の環境でやってみようと思いました。実際公開してみると非常に反応があり、既に水頭症の症状は落ち着いている方から、ごく最近子供が水頭症と診断されて不安を感じている方まで、様々な人がアクセスしてくれました。現在約400家族が出入りしています。オフ会などもあり、時々小さな集まりもあります。

そしてあるきっかけから、当時愛知医大にいらっしゃった師田信人先生にメーリングリストに参加していただき、医師側からの意



スライドを使いながら体験談を語られる山下泰司氏

見というものを取り入れてきました。また先生の善意により、水頭症のガイドブックを完成させ、ホームページ(HP)上で公開しました。過去にも紙のガイドブックがいくつか存在していたのですが、非常に限定的な範囲を対象にしたものだったようです。誰もが閲覧できる環境を整えられたのはとても意義があると思います。

このように、インターネットの有効性は明らかですが、やはりパソコンをお持ちでない方には近づけない世界です。そこでその人たちの情報交換の場として協会設立を思い立ちました。労力的な面を考えると若干の迷いはありましたが、これで救われる人がいる、と考えて1999年10月に『日本水頭症協会』設立に踏み切りました。その翌年には、会報誌「ばどる」(英語で水溜まりの意味)を創刊し、会員に配布を始めました。

また、もう一つ初年度に始めた活動の大きな成果として、「水頭症手帖」の作成があります。シャントには実は患者用にカードのようなものがついており、シャントの品番などが書き込めるようになっているのです。しかし一般にはほとんど流布しておらず、受け取っている患者はごくわずかです。自分や子供の身体に入っているシャントの情報は、医師任せではなく、患者とその家族自身が求めているかなくはありません。そこで、財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン・フジタ財団の助成を得て、「水頭症手帖」を1千部作り、無料で配布しましたが、大変好評でした。

今年、協会創立以来初めての大規模な総会を千葉の幕張で行い、株式会社東機貿からもシャントの実物を展示していただきました。ブースは、シャントの実物をみたことがない患者とその家族の熱気に包まれていました。メーカーには、ぜひ見本用のシャントを作っていただきたいと思います。そして、疑問のあるときにはメーカーと少しでもお話ができる環境があるといいですね。協会がその架け橋になりたいと考えています。

今後の協会の活動としては、過去のメーリングリストで交わされたQ&Aをまとめてガイドブックの形にし、配布しようと考えています。また、情報の少ない地方でも積極的に集会を開く予定です。

日本水頭症協会事務局連絡先(電話でのお問い合わせはご遠慮ください)

〒514-0039 三重県津市押部町10-18

FAX. 059-223-1389 URL. <http://www.ztv.ne.jp/t-kato/hydrocephalus.htm>

徳山二郎氏を偲ぶ

—— ご著書『「人間悪」に甘い日本』に

込められた思い ——

佐多 保彦 株式会社東横機 代表取締役社長

「実は昨年の夏から秋にかけて1ヵ月ほど入院して腹の手術をしましたが、大腸ガンのうたがいであります。(中略) 昨年、病気になる前から次の小論を書きはじめ、病床で中断されましたが、最近ようやく達成しました。(中略) どこか「本」にしてくれる出版社をさがしていただけないでしょうか...」

徳山二郎氏から上記のような手紙を受け取ったのは昨年、氏が亡くなられる半年ほど前のことであった。それから心当たりのあるいくつかの出版社をあたったが、残念ながらお力になることができなかった。それがその後、麗沢大学出版会のご尽力のもと、氏の夢が現実のものとなった。10月14日の徳山氏の一周忌を迎え、徳山氏の最後の日本へのメッセージを紹介させていただきたい。

1987年に徳山氏と出会い、それから亡くなられるまでの13年間、素晴らしいご子息お二人にご紹介いただいたり、個人的にお親しくさせていただくと共に、多くのことを氏から学んだ。敗戦後、発足後間もない自衛隊に入られ、幕僚として戦後の日米関係の構築に寄与された。防衛庁が軌道に乗り始めた頃、当時創設されたばかりの日本貿易振興会(JETRO)においてニューヨークのトレード・センター副所長を務め、日本製品の米国市場への売り込みに努力された。また、我が国の総合的なシンクタンクの先駆けとして、野村総合研究所の創設に尽力され、副社長として実務にあたられた。そして、これからの日本には国際的に活躍できる人材の育成が必要と考え、野村マネジメント・スクールを創設し、初代学長となられた。まさに、日本を愛し、日本の行く末を案じて走り続けられた80年であった。

徳山氏は著書の冒頭でこう述べられている。

「人間の本性を大まかに規定した場合、『性善説』と『性悪説』の2つの見方がある。日本はどちらかという『性善説』の国であり、欧米は『性悪説』に立っているといえる。人間とは複雑な生き物であり、『善』をなすこともあれば『悪』をしてかすこともある」。そしてそこから日本の現状を分析する。

「小さい島国の中の『村落共同体』の意識から抜け出せないでいる日本人は、この『性悪説』をとって仲間を断罪することができない。そのために、日本人は正しい理屈であってもあえて自分の意見押し通すことはせずに、情に流されてしまうところがある。その結果、安易に多数意見に迎合し、『個』の意見がなかなか反映されない。『人間悪』に対して、もっと厳しい対処ができなければ、強力なリーダー



『「人間悪」に甘い日本』

麗沢大学出版会 本体1,800円

一を育てることなど永遠に叶わないだろう。」と。

8月19日付の毎日新聞に「共同体化は国民の性癖」という養老孟司氏の記事が掲載されたのだが、既に徳山氏はこの問題を的確に指摘されていたのだと実感した。記事では、日本のほとんどの団体(会社、病院、政党、組合等ありとあらゆる組織)はいずれ「共同化」し、いつしか「面倒を見てもらえる」共同体に安住して、メンバーの利害しか考えなくなるという日本国民の性癖を糾弾されている。

また、アレックス・カー氏(*)が今年1月に上梓された『Dogs and Demons』(邦題予定「犬と鬼」 講談社より今秋刊行予定)の中でも、日本人の民族性に潜む問題点がKey Pointになっており、徳山氏が触れておられる日本人の国民性の弱点が表現され、強く批判をされている。

徳山氏は初め、タイトルを『人間 — この複雑なもの』とされたかったようである。冒頭から投げかけられた「人間とはなにか」という問いに、日本と欧米の人間観の違い、戦争体験から学んだことなどから、氏の人間に対する考察が深く掘り下げられている。人間としての「個」の確立を目指す姿勢は、この人間観と深く結びついていることが分かる。個人的には、タイトルはこちらの方がしっくりくるような気がする。そして、次のような氏の言葉がある。

「『個』を確立していけば、人間は与えられた時代と社会の中での役割を果たしていくことができる。国といい、世界といい、民族といっても、要は『人間』— 一人一人の生きざまが大切なのだ」。

日本は「構造改革」のスローガンのもと、新しい方向を模索し始めている。今改めて、「この本が僕の人生の卒業論文、そして遺書のようなものです」という国際電話での氏の言葉が思い起こされる。「村落共同体」の意識から日本人が抜け出せるかどうか、改革の成功の鍵を握っていると氏は見抜いておられたのだ。それは、我々の中に強くある独特の文化、国民としての性癖に、グローバルスタンダードの世界から鋭くつきつけられたナイフのようなものである。つまるところ、日本人の倫理観や宗教観まで問われていると感じるのは私だけだろうか。

この本が英訳され、海外の日本研究者の方々に読まれることを強く願う。日本の抱える問題を深く理解する上で、大いに助けになると共に、彼らから日本も多くのアドバイスを受けることができるに違いない。

徳山氏の生きざまは、それほどまでに私たちに大きなメッセージを残されているのである。その遺言を大切にしていきたい。

(*) Vitalité24 巻頭インタビュー掲載。

難治性癲癇(てんかん)に対する 選択的扁桃核海馬摘出術 Amygdalohippocampectomy AHE

—日本でも、もっと評価されてよい脳神経外科の手術の話—

米川 泰弘

Zürich大学に着任して早々に、こちらの事情や印象を記した私の文をVitalité誌に掲載していただいてから早や幾星霜が過ぎ、今回の滞在も9年目に入った。この間に自分が直接執刀した手術も2,500例を越えたのであるが、今回はその中でも心に残る患者さんや、その治療に関して思ったこと、感じたことを何回かにわたって記してみたい。読者の方々にはこれを通してヨーロッパの脳神経外科事情・医療事情と日本のそれとの相違点を感じとり、何らかの参考にしていただければ幸いである。

癲癇(てんかん)の外科的治療は、Zürich大学が1937年のProf.Krayenbühlによる当科開設以来一貫して重点を置いているトピックスである。このことは私の前回の滞在中(1970 - 1976)にもうすずす感じてはいたのだが、うかつにもこれほど重要なテーマであるとは認識していなかった。当時の私はProf.Yasargilのもとで、Zürichがメッカであったマイクロサージャリーの修得しか眼中になかったのだといえる。ただProf.Krayenbühlが脳波・癲癇の専門家とタイアップし、手術中に脳波を記録して癲癇の異常波を発する箇所を切除されている手術はよく目にしていた。難治性の、いわゆる側頭葉癲癇に対する側頭葉切除術は、1950年頃に始められ1970年までには標準的な手術として確立していたのである。側頭葉切除に際してはその内側にある扁桃核、海馬をも切除するのが効果的であることも分かってきていた。さらに時代が進んで、今回のこの稿でテーマとしているAHEは、1975年以来当科で、私の前任で師匠のProf.Yasargilが癲癇を専門とする神経内科医と共同で開発し発展させてきたものである。方法的、技術的な前提が整えば、側頭葉を切除しなくてもこれを保存して、もはや機能していない癲癇の源となっている方の側の扁桃核、海馬を選択的に切除すれば、脳の高次機能をよりよく保存できるという意図のもとにこの方法が開発された。

いわゆる側頭葉癲癇は、側頭葉と扁桃核、海馬などを含む大脳辺縁系に源を発する癲癇発作である。このタイプの癲癇の典型的症状としては、実際は匂いなどしないのに変な匂いを感じたり、味覚、視覚にも異常が出たり、一見普通の行動をとっているように見えるものの意識は正常でなく、朦朧状態とみなされるような発作の出現などが挙げられる。これらの諸徴候が個々のみでとど



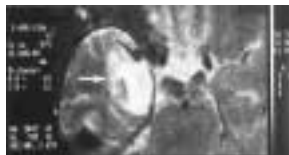
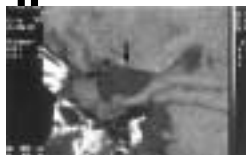
Hippocampusの引く車に乗る海神
Poseidon(Neptun)はPoseidonのローマ名)
(Petiscus AH, 「ギリシャ・ローマ神話」
Leipzig 1873より)



海馬を右側脳室上方から見たもの(脳標本)
長さは約8cm
(Duvernoy HM, München, 1988より)

まる人もいれば、それらが複合して現れたり、または全身の痙攣発作にまで進展する人もいる。さて上記の海馬とは変わった名前であるが、これは側頭葉内側にある構造物で、その形がギリシャ神話に出てくる海の神がセイドンが駆る馬車を引く海の怪物Hippocampusの尾に似ていることからこの名がつけられた。比較的大きな構造物であるにもかかわらず、その機能に関してはまだ解明されていないところが多い。分かっていることは、最近の出来事に関する記憶(recent memory)に関係していることである。特にこれが左右両側ともに破壊されると、多少の挙動障害(無感動・無行動)に加えて重篤なrecent memoryの障害が起きる。このことはアルツハイマー病、老人性痴呆において両側性海馬の病変が見られることからよく理解できる。片側性の傷害でもその本人にとって優勢半球の側が冒されると、言語・構語障害が起きる。次に扁桃核の機能であるが、これは恐怖の感情、怒り、攻撃性などいわゆる原始的感覚感情と関係しているとされている。このように、側頭葉周辺に関してはヒトの人間性に関わる重大な機能が知られているだけに、この手術に踏み切るには確とした技術的な成功の見通しと、術後に上に述べたような機能の障害や異変が出ないとの確たる見通しが必要である。

術前には個々の患者について本手術が適応になるか否かを決定するために様々な精密検査を要する。頭蓋底のForamen ovale卵円孔に脳波の電極を挿入して側頭葉内側から確実に異常放電があることをキャッチしたり、神経心理学のテストでその人の言語中枢が左右のどちら側にあるのかを同定したりする。さらにはその優勢半球のAHEが必要なときには、選択的Wada testといって、前脈絡動脈に選択的に血管造影用の微小カテーテルを導入した上Amytal®を注入して、海馬機能を一時的に遮断した状態にし、言語、recent memoryの検査を行うのである。次に手術の実施にあたってであるが、側頭葉内側の、病的に変化した側の扁桃核、海馬を摘出すれば癲癇抑制の効果のあがることが分かっている、そう容易にことを運ぶことはできない。なぜなら、扁桃核の内側には大脳基底核内包を還流する細小動脈群が存在しているし、海馬の内側には視神経の延長構造物である視索、前脈絡動脈(これは随意運動を司る錐体路が形成する内包の後脚を還流している)、後大脳動脈(後頭葉、視床、



米川 泰弘 / よねかわ・やすひろ
1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

AHE術後のMRI（左：正面像 中：側面像 右：平面像）。矢印の大きく黒く抜けているところ（平面像は白色）が扁桃核、海馬を摘出した部分。

側頭葉下面を還流している）などが存在するので、終始細心の注意を払って手術を進めなければならない。これらを術中に損傷してしまうと、その結果として取り返しのつかないような神経症状、即ち片麻痺や視野障害（同心性半盲）を引き起こすので、術者はこの領域の局所解剖を熟知理解していることが必要である。また、万一損傷が起きた場合には、速やかに損傷血管に微小血管縫合を行い循環障害を防ぐことができる技術を備えていなければならない。

私が1993年に着任した時点で、この手術施行に不可欠のインフラ（癲癇・脳波の専門家、神経心理学専門家、選択的Wada testが行える神経放射線科医など）は依然として存在していても、この手術ができる脳神経外科医がProf.Yasargilの定年退官でいなくなったわけである。後任で来た私はAHEに関しては日本で若干例行っていたので（と思っていたのである）何とかできると考えていた。ところがたちまち私の行っていたのは「まがいもの」のAHEであることを思い知らされた。自分は脳血管外科医であるとの多少の自負はあったが、脳血管の密集するSylvius溝を開けて島insulaの皮質に約1.5cmの切開を加え、この切開創から海馬を約3-4cmの長さにとわってひとかたまりとして摘出するのは当初至難の技であった。術後には必ずMRI（核磁気共鳴画像）で、新たな出血あるいは梗塞をきたすことなく、目的とした程度に扁桃核、海馬が摘出できたかどうかを神経内科医とチェックするのであるが、摘出範囲が充分でない、外見上は手術がうまくいったように見えても癲癇抑制の効果は少ないか、あるいは全くないことがある。これが私の言う、「まがいもの」のAHEである。初めの頃充分に納得いく画像結果が得られなかったため、退官直後アメリカに再就職される前のProf.Yasargilにビデオテープをお借りできないかとお願いしたところ丁寧に断られた。彼の書かれた論文を読み、神経内科医に術中テレビモニターでチェックしてもらったり、解剖学教室で脳の標本を得て検討したりして、悪戦苦闘の末50例ほど何とか大きな合併症もなく行うことができてから、改めてProf.Yasargilに手術を実際の症例でデモンストレーションしていただく機会を作りお願いした。この頃すでに彼はアメリカに就職されていたのでスイスに帰られた際にお願いしたのであるが、比較的気安くOKして下さったものである。これで彼の手術と自分の手術に術式として大きな食い違いがないことを

確かめることができた。ビデオをお借りできなかったのは心に引っかかっていたが、ご自身の手術が安易にコピーされることの影響を懸念されたのであろうと解釈した。また結果として私は各ステップを自分のものとしながら本術式を体得することができたので、却って感謝している。また近年、従来の術式では限界で到達できなかった海馬後半部起因する癲癇に関して、これを解決する私独自の新しい術式を開発発表することができた。常日頃当科の伝統の重みを意識していたので、いささかでもこれを継承発展させることができたかもしれないとホッとしているところである。

本手術を受けにスイス全国はもちろん、ヨーロッパ諸国から患者が来院する。Zürichの400例の長期追跡調査結果では、術後約70%弱の患者において癲癇発作が完全になくなっている。ドイツ人のギター演奏家はコンサートの最中に発作が頻繁におきて舞台に出られなくなっていたのであるが、手術後何の不安もなく演奏活動ができるようになったとの喜びの報告があった。スイスのフランス語圏の女子学生からは、発作がなくなったので学業に専念できて嬉しいとの手紙をもらった。オーストリアからは、この手術を受けて発作がなくなり再び車の運転ができるようになったことを、かの地の「癲癇患者の会」の会誌に投稿した文を送ってきてくれた。治療成功後の患者の喜びはそのまま医師の喜びであることは言うまでもない。

日本においては癲癇の外科的治療は明治時代の伊藤隼三教授の先駆的な仕事はあるが、どちらかという患者サイドからもこれを治療するサイドからも積極的には受け入れられていない領域である。薬の服用で多少とも発作が少なくなれば何も手術までしなくても、というのが日本人の一般的な感情・認識であろう。一方こちらでは、この手術に限らず一般的にいって、罹っている病気・症状が外科手術で解決するものであれば、また薬を飲まなくてもよくなるものであれば、積極的に手術を受けようとする人々が多いとの印象を持つ。従って、例えば冠動脈バイパス手術を受け、椎間板ヘルニアの手術を受け、さらに股関節の手術を受けた傷跡のある人が今度は脳神経外科の手術を受けにくるといったことが少なからずある。これはヨーロッパ人のメンタリティということで片付けてしまえばそれまでだが、外科的治療によって上記の患者例のようにこれまでと違った世界が開かれることもあると認識していただければ幸いである。

出会い (19)

若き日の恩師を偲んで

- 神の逆風 -

奥村 一郎



「よき友は千金の宝」「よき師は道の光り」といわれる。すでに長い人生となれば多くのことが忘れられてしまうだけに、そこに残る思い出は、タベの空に光る金星のように美しい。今また、ここで思い起こすのも、若き日に出会った三人の師である。というのも、その三人の師とのかかわりのなかで一つのこと共通していることが、今なお不思議だからである。これまでに、本誌のなかで数回にわたり、若き日のドラマをかなり詳細に書かせていただいたが、そこに一貫する空白の部分は今なお気になっている。時に、それに気づかれた読者からのご質問も届けられた。たしかに、その時の私の、「魂の遍歴」の底を流れていた「地下水」にでも例えられる「隠れた神との出会い」のようなものがあっただろうと思われる。空気のようにつかみにくいもの、しかし、たしかにあるもの。言葉にならぬ「沈黙の逆風」がある。禅で「大疑団」というほどのものではないが、言葉にならぬ沈黙の重みを感じさせられる。その説明はかえって、読者の問いにさらに覆いをかけてしまうかもしれない。大きな城門の狭い脇門ぐらいいもなれば幸いである。ともあれ、すでに半世紀をさかのぼる遠い青春時代のことである。焦点を定めて筋を追って行くつもりだが、時に話の筋が前後したり、重複しても悪しからずご了承のほどを。

1. ナーベルフェルト師(1897-1979：神言会司祭)

『沈黙と不在』

(「出会い14」 VITALITE Vol.26)

私が、新約聖書を手にしたのは、旧制一高に入学して数ヵ月した時であった。独文専攻科に属していたので、著名なゲーテの名劇「ファウスト(FAUST)」などの講義を通して、その時から聖書に興味をもち始めていた。しかし、新約聖書の冒頭マタイ福音書二章を読むだけでがっかりした。このしょっぱなからの聖書の蹟きを疑問にもったまま、ナーベルフェルト師と出会ったのは、戦後まもなくのことであり、東京高円寺地区の青年会で始められた聖書研究会であったこともすでに述べたが、その後、東京郊外吉祥寺にあったナーベルフェルト師所属のカトリック修道院に移って集会を続けた。それから、ますます、反聖書、反キリスト教、反カ

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

トリックの論文作成に熱中し、毎日のように修道院に通った。朝9時から夜9時まで、部屋にこもり論文を書き続けた。夕方の第一時間は、ドイツ語勉強を兼ねて神学討論の継続という変わらぬスケジュール。週の聖書研究会も欠かさず集まり、東大仲間といっしょに反キリスト論に大いに気炎をあげていた。ところで、妙なことに、そこに一度もナーベルフェルト師は出てこられなかった。その頃は、以前にも書いたように、東大の法学部の講義にはまるで欠席。熱心に出たのは文学部の講義ばかり。それに教会や修道院での講義らしきものを聞いたこと全くなし。いずれにあっては全く落ちこぼれ。しかし、今もって不思議なのは、ナーベルフェルト師の沈黙と不在。なぜ? どうして? それはなんであったのか? 今もって不明。

2. 中川宋洌老師(1907-1984：臨済宗龍潭寺)

『洗礼を受けなさい』

(「出会い16」 VITALITE Vol.28)

宋洌老師にお会いしたのは、東京駒場の旧制一高に入学まもなく頃。その年の末、12月8日には日本の世界大戦参加宣言、ただちに、パールハーバー襲撃の成果が大きく報道された。しかし、開戦初期の輝かしい戦勝機運もまもなく、米国の逆襲にあって、たちまち戦況は全面的に危機状態に陥った。そして遂に、続く年1943年12月1日に「学徒出陣」の緊急上命令が公布された。そのため、先輩でもある老師の禅指導は1年半に短縮されてしまったが、構内の奥に建てられた「^{さんさいどう}三昧堂」と名づけられた禅堂で、毎月の13日に三島の龍潭寺より足を運び後輩の指導に当たってくださったので「十三日会」と名づけられていた。当時、二百年に一人の傑僧とまでいわれた龍潭寺管長山本玄峰老師も折々同行して指導してくださっていた。しかし、この幸いな時期は中断され、それから、



終戦後復員するまでの1年9ヵ月が過ぎ去った。当時の凄まじい軍隊生活については今書く余裕はない。とにかく、原子爆弾の広島と長崎の投下によって歴史上初めての惨敗に帰した。その後まもなく、東大法学部に復学しながら、思いがけぬ運命の嵐に巻き込まれてしまったことも、読者はすでに本誌を通してご存じのことと思う。その時の三島の龍潭寺の一夜は、宋瀏老師の一言によって、私の生涯を全く変えてしまった。

「あなたは、今、キリスト教をよく分かったと思う。しかし、まだ、頭でしか分かっていない。体で分かなければ駄目だ。そのためには、洗礼を受けなさい」

まさに、「神の逆風」とでもいうのが、その時の老師の落雷のような言葉は今なお、言葉なき大音声となって私の耳朶に響いている。まさに青天の霹靂! 「不知の大公案」であった。その時刻は、1948年6月28日の夜9時頃。ところで、それから少し前、夕暮れの5時、突然北陸の福井大地震が起きたことを知ったのは、廊下で座禅をしながら老師の帰りを待っていた時のことであった。二つの出来事は、事柄こそ違え、その時の私にとっては相重なる一つのことであった。そこで忘れられないことというのは、福井の郊外にある曹洞宗本山永平寺の創始者、道元禅師の著書『正法眼蔵』は、その頃、肌身離さぬ愛読書であったからである。永平寺の被害は比較的大きくはなかったようだが、入り口の大門の石塔が倒れたということだった。偶然とは済ませられない、なにか私の運命を指し示すものがあるように思えた。

3. 下山正義師(1910-1996: カトリック司祭)

『子供教室』

(「出会い17」 VITALITE Vol.29)

上記のような宋瀏老師の力強い勧めの言葉、それに覆いかぶさる福井大地震に突き飛ばされたショックに耐えながら、翌朝、老師と暁天座禅を共にしてから暇乞いをした。「洗礼を受けよ」という老師の言葉は動かない岩盤のようであった。それから数日後のある日、街中を歩いていた時、ふと、耳元で「教会に聞け」という声が聞こえた。それも、はっきりと澄んだ声だった。それからしばらくして

訪ねたのが大森カトリック教会。出てこられたのが、主任司祭下山正義神父。洗礼の希望を伝え、その準備の勉強を願った。「よし、分かった」のひとことで、次の日から教会に通うことになった。ところで、その勉強は小学生10名あまりの「子供教室」であった。騙されたような憤懣よりも、呆気にとられて何度も聞いているうちに、まだ幾つも頭にこびりついていた難問が不思議に解けていった。例えば、下山神父は最初からその意図であったらしい。まさに「われらのおやじ」と渾名された下山神父であった。「娘の裔よ回心せよ」と、肩を叩かれたことは、洗礼によって、神の子となるための謙遜を教えられたのであろうか? にしても、今もってよく分からない。

以上三人の恩師に共通していたことは、常識を超えるというか、人間の思惑を吹き飛ばす「雲の逆風」のような体験であった。そこには、地底に落ちた哀れな私への手放しの愛と信頼があった。大地が揺れ、天が真暗になったその時に、神に行く道を、貧しい私に拓いてくださった方が、私の先人であり、尊い恩師であった。

表紙の写真



写真: クリス・スティーブル・パーキンス
バングラデシュ、1999年

バングラデシュの夏は暑い。水自体は豊富な国だが、飲用に適した水は不十分だ。雨季、バングラデシュでは家が水浸しにならないよう、家を高くするための盛り土を掘る。掘ったあとにはため池ができ、人々はそのため池の水を飲んで渴きを癒した。しかし、ため池の水は塩分が多く、おいしいとはいえない。そこで先進国の支援のもと村に井戸が掘られた。ポンプの一押しで、いくらでもおいしい水が汲み出せる。

井戸は人々に喜びと安恵をもたらした。

しかし度重なる洪水は幾度も井戸を破壊し、濁流が井戸を呑み込んだ。そして、無秩序な地下水の汲み上げは、水位の低下を招き、井戸を枯らした。

つかの間の豊かさを暗示するように、パーキンスの視線は人々を通してどこか遠くをみつめている。

わが心の遍歴 —最終回—

(9) 現代における宗教と哲学の問題

花岡 永子

現代は一般的には、宗教無き時代と言われ、また哲学無用論が説かれる時代と成り果ててしまっている。何故だろうか。それは、円とか球に譬えて言えば、世界の殆どの人々が自らのみが世界の中心、宇宙の中心であるということのみに生き抜こうとしていて、森羅万象の一切がすべて、絶対の中心であると同時に、世界あるいは宇宙が形成されて行く過程における一周辺でしかないということをおぼろげに忘れているからではないだろうか。

キリスト教においては、ルターが『キリスト者の自由』の冒頭の部分で、「キリスト者は、全てのものに仕える下僕であると同時に、神以外の全てのものに君臨する王者である」という意味のことを語っている。また、禅においては、「賓主互換」といって、仏をもキリスト教の神のように特別視せず、賓と主が常に交換可能な変化自在の境涯に生きられる。大乘仏教を基礎とした西田哲学においては、一と多、自己と世界、事と理、時間と空間等々は、対象的には絶対に矛盾し、相対立して、二極的、二元的であっても、「絶対の無限の開け」である西田の所謂「絶対無の場所」においては、それらは同時に一として成り立つ。

諸科学は、ハイデッガーも述べているように、本来的にこの世の現象界に属するものを研究対象とする。ここでは、個々の人間のあり方は、万物のいわば絶対の中心であり、現象界の一切を対象化して、自らの前に立て、表象して、これを色々に観察する。ここでは、観察者の人間の自我は、観察されるものの渦中にはなく、その外部に、観察されるものとは別個のものとしての観察者に留まっている。

しかし、19世紀末のアインシュタインの相対性原理や20世紀初頭のN.ボーアの量子理論やハイゼンベルクの不確定性原理が妥当するようになってからは、物理学の領域からも、ミクロの世界では既に観察者が観察されるものから分離されて、前者が後者から無関係に観察することが不可能となり、時間と空間の絶対化が不可能であるのみならず、因果律すらも妥当しなくなってきた。哲学においても、主観と客観が対立して、前者が後者を観察し、記述することが、実存思想や実存哲学の勃興以来不可能となってきた。この傾向は、実存思想関係の哲学においてのみならず、本質 (essentia) と実存 (existentia) の根源としての「生」から哲学するニーチェの「生



花岡 永子 (別姓: 川村 永子) / はなおか・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年女性老練家'96年には京都大学より文学博士号を授けられる。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化科学研究科教授として哲学、宗教哲学を教える。

著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

の哲学」によって更に徹底化した。またその後、生をも遥かに超越した「有そのもの」(この世の現象的なものとしての「有」[beings]の根源と理解された「有そのもの」[being in itself])から新たに哲学しなおそうとする20世紀の偉大な哲学者の一人であるハイデッガーによって、先の傾向は、20世紀における逃れられない哲学の根本事実となった。自然科学からも精神科学からも、現象界のものに主客分離の立場から対象的にしかかわる科学のみでは、もはや科学の探求は全体的に十分にはなされ得ないことが、既に20世紀に事実として露となった。同様のことが、哲学についてのみならず、宗教についても語られ得ると考えられるのである。

1. 哲学と宗教について

哲学とは、ギリシア語の語源から理解すると、「知恵への愛」を意味するが、知恵への愛が、約3千年の哲学の歩みの中で、「知識への愛」となってしまうてきている。哲学が知恵への愛である限りでは、哲学の役割は、一切の学問領域のみならず、一切の生活領域をも基礎づけ、連関づけ、説明できるのでなければならない筈である。しかし、知識への愛となってしまった哲学は、他の諸科学と並ぶ一科学になり下がらざるを得ない。この場合には、哲学は「学としての哲学」以上のものではありません。他の諸科学や生活世界とは内的関係のない一科学となり果ててしまい、現実から浮き上がった、現実の生活とは内的関係のないものとなり、諸科学間の連関性や、またそれらの生活の諸領域との連関性を説明することも、反省することもできなくなり、結局哲学は、何の役にも立たないという理由で、現代におけるごとく、無用と見なされてしまうことになる。

しかしながら、哲学は、学としての哲学であるのみならず、諸科学をその根底から基礎づけ、連関づけ、更に諸生活領域をも基礎づけ連関づけ、且つ諸科学と諸生活領域との関係を根源から連



1976年暮の学会の懇親会にて。向かって左から故高田三郎京都大学名誉教授（私たちのお仲人）と亡き夫・川村栄助。

関づけ、基礎づけ、説明し、反省することができるのでなければならぬと考えられるのである。しかも、後者の哲学の核心には、宗教が生きているべきであると理解されるのである。というのも、ここで語られる宗教とは、既成の何らかの宗教教団に帰依することだけを意味するのではなく、森羅万象の根底に開けている心とか、宇宙全体に通底している開けを意味しているからである。筆者はこの開けを「絶対の無限の開け」と理解している。この場合の「絶対」とは対を絶しているだけではなく、絶対の「自我否定」を意味し、この否定によって真の自己が目覚め、思考や生きることに対しての何らの強制的な枠組みも無い、無限の開けに慈悲やアガペーとしての愛に自由自在に生きることの可能な開けが自覚されることを意味しているのである。

2. 現代における宗教と哲学の問題

哲学が生活から切り離され、宗教が哲学から切り落とされて、一方では現実から浮き上がってしまった「学としての哲学」のみが生き残り、他方では宗教無き時代へと世界は変わり果て、豊かな人間性とか倫理性とか宗教性の無い世界に私たちは生きている。このなかで、森羅万象に通底し、宇宙全体に開けている「絶対の無限の開け」の自覚としての宗教が、そしてこの自覚から、諸科学や諸生活領域が基礎づけられ、連関づけられ、説明され、反省され、そこに生きる各々のものの霊性や人間性やその倫理性や宗教性が反省される哲学が、今この時代にどうしても、私たち一人ひとりによって見出されるようにと努められねばならないと考えられるのである。

ところで、今年の7月中旬には、イギリスのケンブリッジ大学で、イギリスの世界人名辞典協会の第28回国際会議が開催された。筆者も初めてそこの講演に招かれて約1週間、200名の世界各国の派遣者の方々と生活を共にしてきた。そこでは、それぞれ自らの歩む道を通して、しかも一切の権力欲や名誉欲や暴力から自由で、平等な友情と対話で世界を結びつつ、世界の平和を実現しようと命懸けで努力する人々の会議が既に30年以上も続けられてきている。これは、どんな営利事業からも、どんな党派心からも全く自由な会議である。こんな国際会議があることすら知らなかった筆者で



1994年9月京都の拙宅にて。向かって右からR.ヴィール教授、P.オバンク教授、筆者。

はあったが、このような志を同じくする方々の集まる会議に招かれ、この協会の永世維持賛助会員に指名されたことは、今後のこの世での筆者の多難な心の過歴にとって全く思いがけない大きな恵みであった。このような志を同じくする方々との出会いは、心の旅路に100倍もの勇気を与えてくれるからである。

思えば、20数年前に、40代半ばにして全身を癌に冒されてこの世を去るにあたり、「自分の分も学問に励んでくれ」という言葉を残していった今は亡き夫の思いは、この筆者にはなかなか果たせそうにもない。しかし、たとえ歩みは遅くとも、一步一步を誠そのものをもって歩みたいものと思っている。夫の重病によって間もなく一人残されるであろう筆者を思いやってくることと思われるが、重病人の夫から筆者は申し訳なくも色々生きる勇気を与えられた。例えば、筆者の母方の曾祖父である島田重村（本名：島田重礼）の東大での漢学の講義には、まだ学生であった西田幾多郎博士が聴講していたと、下村寅太郎著『若き西田幾多郎先生』のその事実を書いた文章を示しながら、西田哲学の難しさに嘆く筆者を「やれば出来る」と励ましてくれたのも亡き夫であった。また、世界哲学会でハンブルク時代に夫の指導教授であったP.オバンク教授やR.ヴィール教授にお会いし、筆者の哲学の歩みを力強くするようにと、哲学にたじろぐ筆者を諫めてくれたのも亡き夫であった。筆者が、早期の癌の開腹手術後で腹痛を抑えつつ死を覚悟で、夫の言葉を思い出しながら、1993年のモスクワでの世界哲学会に研究発表に出かけたことがあった。モスクワ空港からバスでモスクワ郊外の高層の国際学会場に駆けつけて、入口のエレベーター前に大きなスーツケースをもって近寄ると、そこにはP.オバンク教授とR.ヴィール教授がお二人でエレベーターを待ちながらお話をしていた。そこで、約20年ぶりの積もりにも積もったお話をし、それから1週間程学会でしばしば一緒にになり、筆者は両教授との学会での対話で、生死の間を彷徨う程の体調から、大きな生きる力をお与え頂いて帰国したのであった。しかも、その翌年には両教授は、京都での国際会議にご出席の序でに、その学会に筆者をご招待下さり、更に国際会議後、京都の拙宅での夕食にまでも来て下さった。これらのお出来事について、両教授に、また今は亡き夫にも心から感謝している。

実りあるヨーロッパ研修

ーソムリエの旅行記(その2)ー

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。
95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン
関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・ジュヴレ・エ
デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商会業務
室在籍。

ボルドーで

ボースでの研修を終えた私は10月21日にパリに戻り、次の目的地の重要なワイン産地であるボルドーには、10月25日に急行列車出発することになりました。

そこで、ボルドーへ出発するまでの23日、24日を利用して、リング酒(カルヴァドス)の産地として有名なフランス北部のノルマンディーとブルターニュに、モン・サン・ミッシェルの観光も兼ねて小旅行をすることになりました。フランスの中でも北側に位置するためぶどうの栽培に適さないこの地方で、リンゴから最高のブランデーを生産していることに感心しました。帰路、優れた白ワインの産地として知られるロワール河の流域をめぐり、点在する歴史上名高い古城の数々を見学しました。

さて、ボルドーに到着すると、まずその都市の大きさにびっくりしました。この都市は、ただ単にワイン産業の中心地としての役割だけでなく、ほかに木材、石油化学、造船などの貿易港として極めて重要な大都市なのです。あのコート・デュ・ローヌやブルゴーニュで味わった牧歌的な雰囲気はまったくなく、まさに商いの町という形容がぴったりの都市でした。その上、マラン氏が紹介してくれたのは家族経営の小さなワイン卸売業者でした。まるで丁稚奉公の見習いのような扱いで、しかも予約してくれたホテルは不便な場所にある安ホテルでした。加えて肝心のシャトー見学も第5級のシャトー1カ所だけ、あこがれていたシャトー・ラトゥールやシャトー・マルゴーは日程に入ってなく、がっかりしました。どうもこの業者は経済復興を遂げた豊かな日本の実情を知らず、私の懐具合を寂しいものと考えたようです。そこで東京から持ってきた名刺を頼りに大手のワイン業者に電話をして、やっとグラヴ地区のシャトーを2カ所見学できました。

ブルゴーニュと比べ、ボルドーのワイン生産者はその規模の大きいこともあります。非常に気位が高く、ブルゴーニュのヴィニキュロン(*1)との素朴な友情で結ばれる関係は作れないと感じ、あらためてブルゴーニュのよさを認識しました。

さらにボルドーの北にあるブランデーの産地コニャックのカミュ社に、「ボルドーにいますので、迎えにきてもらえるなら行きたい」と連絡しました。これは予定外の行動であまりあてにしていなか

ったのですが、しばらくして先方から、「明朝運転手が迎えに行くからぜひひきなさい」とメッセージが届きました。朝、私は日帰りのつもりでカメラだけを持ってホテルの玄関で待っていると、立派な車がきて私をカミュ家のシャトーに運んでくれました。そして玄関では社長一家が総出で大歓迎してくれました。社長の次男で営業部長のピエール氏が、ぶどう畑や工場を案内してくれ、世界で最も高価なスピリッツであるコニャックの製造過程を丁寧に説明してくれました。そして、「今夜はここに泊まっていきなさい。一緒に食事に行きましょう」と誘ってくれました。すぐに運転手と呼ば、ボルドーのホテルから私の荷物を運ぶよう命じてくれました。その夜は社長夫人と次男夫妻の3人と一緒に、郊外のすてきなレストランに案内されてご馳走になり、豪華なお城の部屋で一夜をすごしました。翌朝はパリに戻るため駅まで送ってもらいましたが、別れ際に私は「素性の知れない私をたった一本の電話でこんなに親切にしてくれたのはなぜだ」と聞いてみました。ピエール氏は、「行きたいから迎えにこいと言った心意気が大変嬉しかった。これから日本人と親しい関係をつくっていききたい。次にくる時はぜひ奥さんも一緒に」と言って、お土産までいただいた上で別れました。ボルドーでの滞在は失望しましたが、偶然からコニャックでは思い出に残る貴重な体験をしました。

パリでのレストラン研修

ボルドーからパリに戻った10月末から11月の中頃まで、マラン氏作成の日程に従ってエッフェル塔の1階にあるレストランで働きました。このレストランは主に観光客と、企業が海外の取引先のVIP接待によく利用するレストランです。昼間はランチ、夜はディナー・ショー付の食事で、当時非常にはやっていて毎日大忙しでした。消費単価は高く、ワインの売れ行きもとてもよく、常時6人のソムリエがそれぞれ受け持ちのテーブルで忙しく立ち働いていました。そこで私はソムリエたちのアシスタントとして働きました。この職場で運がよかったのは、ソムリエの長で、後にプラザ・アテネのチーフ・ソムリエに抜擢され、同時にフランス・ソムリエ組合会長も務めることになるジルベール・ルトール氏と出会えたことです。氏はフランス語の苦手な私になるべく英語で話しかけてくれ、研



コニャック市街地中心部に位置するフランソワ一世の像(*2)

修生とはいえ決して若くない私に気がつかってくれました。後にルトール氏は、1982年に東京で開催されたホテル・オークラとブラザ・アテネ協賛の催しで一緒に働くことになりました。

この短い研修で、飲食業にたずさわる人々の待遇に日仏間で大きな差があることに気がつきました。なにより驚いたのは従業員の食事です。日本のホテル業界も30年経った現在、待遇、福利厚生は大きく改善されているのは事実です。しかし、1971年当時はホテルの従業員に限ったことではないのでしょうか、社員食堂で出る食事(賄い)は極めて粗末なものでした。そのため、研修初日に食堂で他のソムリエと同じテーブルを囲んだときに、各テーブルにワインが1本ずつ置かれていて、皆がそれぞれグラスに注いで飲み始めたのでびっくりしました。日本のホテルではアルコール飲料の扱いが非常に厳しく、勤務中の飲酒が見つかる即事解雇でした(ソムリエのワイン・サンプルや、勉強のための試飲は例外)。そこで面白かったのは、ソムリエのテーブルでは卓上の平凡なワインを若いギャルソンに与え、自分たちはセラーから選んできた銘醸ワインをあけ料理(お客に出すのと同じ)と一緒に飲み、真剣にワインとの相性について意見を交わしあうことです。そして、最後はバスケットに盛られた種類のチーズをワインと試し、チーズの熟成度についてコメントしあいます。あまりにも大きい日本との差を羨ましく思いました。帰国して職場に戻ってから同僚にこの話をし、将来いつの日か日本のホテルでも同じことができる時代がくるだろうかと聞きましたが、全員が絶対にこないと声を揃えて笑いました。

一流のホテル・レストランめぐり

パリ滞在中に日帰りでシャンパーニュ地方に出かけ、メーカーを訪問し、地下深く掘って作られたセラーで発泡酒の王様であるシャンパンの製造過程を見学しました。また、今回の研修で欠かさない重要な使命として、三ツ星を含むレストランで食事をし、料理の味、ワインの選択、サービスのグレードを見て回りました。トゥール・ダルジャン、ラセール、ドルーアン、ブラザ・アテネ、ジョルジュ・サンクなど、どこも料理は素晴らしく、サービスマンの自信に満ちた身のこなしに感心しました。特にワインのサービスには注意し、当時日本では知られていなかったデカンタでのサー



シャンパンの発酵製造過程の現場

ビスなど参考になることを多く学ぶことができました。

こうしてフランスでの研修を終えた後、予定どおり今度はロンドンで数日を過ごすことになりました。

ヨーロッパ研修を終えアメリカへ

ロンドンでの宿泊先はマラン氏が現役時代活躍したドーバー・ストリートにあるブラウンズ・ホテルでした。一見客を泊めない古い伝統と、上流階級の婦人がアフタヌーン・ティーに集まる人気の場所として知られる由緒あるホテルでした。このホテルには純イギリス調の酒場があり、しかもパーマンが生粋の英国人なので驚きました。なぜならロンドンの多くのホテルの飲食サービスは、北欧やイタリア、ギリシアなどからの出稼ぎの人たちで支えられていて、イギリス人はあまり見かけないのです。従ってサービスの質は決して高いとはいえず、勘定書きも間違いが多くていちいち苦情を言わなくてはなりませんでした。

ロンドンからアムステルダムに戻った後、集めたメニューやワインリスト、資料の整理に数日を費やしました。その間思いついてデンマークのコペンハーゲンに飛び、有名なツボルグとカールスバーグのビール工場で見学試飲をし、スカンジナビア風のヴァイキング料理を本場で楽しみました。これでヨーロッパでの日程は全て終了し、11月23日に次の目的地であるカナダのモントリオールに向かったのです。

(*1) ぶどう栽培者のこと。畑からぶどう栽培者の人影が絶えることがないほど、多くの人の手間と時間がかけて煙は生かされているという意味で、『ぶどう畑はヴィニユロンの影で生きる』という古い言い伝えが、ブルゴーニュ地方に存在する。

(*2) フランス国王。コニャック地方出身。1515年即位。ルネサンス文芸を愛好・保護し、フランス・ルネサンスの父といわれる。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世が、まだに息づいているブルゴーニュへようこそ、
 極上の純酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、
 中世そのままの街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、
 豊かな生命力が、はだのぬき産物に感じられる地方、
 それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
 (株)佐多商会営業室 担当: 岩沢
 Tel. 03 3582 5087

